

《研究ノート》

遺跡の分布から読み取れること

—土気緑の森遺跡群を参考として—

西山太郎

1. はじめに

千葉県先の土器時代研究は、佐倉市星谷津遺跡における層序の確立、印旛郡印西町木刈峠遺跡における石器群の構造的な研究などを経て、個別別資料の分析へと発展してきた。こうしたなか、柏市中山新田2遺跡や四街道市御山遺跡の環状ブロック群が確認されるなど資料も増加して、新たな局面を迎えようとしている。

ところで、先土器時代の遺跡分布については、これまで様々な研究されてきた。それを集団という観点から検討して旧石器時代の社会構造の解明を試みたのが、近藤義郎氏、小野昭氏、稲田孝司氏らの一連の論文である(近藤1976、小野1976、稲田1977)。また、春成秀爾氏は、大遺跡と小遺跡の存在に注目して、その分布と集団とのかわりについて検討されている(春成1976)。

先土器時代の遺跡は、河川や湖沼沿い、海岸沿い、石器原産地などに分布し、特定地域に集中することが知られている。この点を正面から取り上げたのが安蒜政雄氏である。氏は、武蔵野台地、相模台地の河川沿いに遺跡が多く分布することに注目して、遺跡群を類型化し、遺跡間にみられる離合集散な関係を移動生活にあると論じられている(安蒜1985)。また、戸沢充則氏はハヶ岳山麓に分布する遺跡も加え、石器群のあり方及びその分布状況から先土器時代の社会構造を単位集団、集団の領域と交流という点から検討されている(戸沢1990)。

遺跡分布については、小規模な集団を単位として、狩猟対象と採集植物の変化に応じた離合集散を繰り返した季節的移動生活の現われとするのが、一般的な考えである(県ライブラリー1984など)。また、岡村道雄氏は、分布調査の地域的粗密や精度などを考慮したうえで、「われわれが認識している遺跡分布は、ある小集団が等質な意味を持った移動を、一定範囲内で短期間ずつ繰り返した結果と

考える。」(岡村1996)とまとめられている。

このように遺跡の分布、石器群の在り方をいかに把握するかは、先土器時代の社会構造を研究する上で重要な課題といえよう。

そこで、ここでは(財)千葉県文化財センターが発掘調査を行ってきた先土器時代遺跡のなかで、比較的広範囲な地域を対象として確認・本調査が実施され、発掘調査報告書の刊行された土気緑の森地区に所在した遺跡群を取り上げ、遺跡分布の意味するところについて考えてみたい。この遺跡群の所在する地域は村田川の最上流域にあたるので、本県における普遍的な先土器時代の遺跡立地を表わしたものではないかもしれない。また、周辺地域の調査が行われれば、内容の変更も予想されることはいうまでもない。

ところで、遺跡の分布を考えるにあたって注意しておかねばならないのは、遺跡の同時性である。稲田孝司氏は、「大規模遺跡といわれるものの存在にもそれほど確かな証拠はなく、遺跡に残されたブロック群や礫群から集団規模を推定する場合には、…(中略)…厳密な同時存在の限定が必要である。」(稲田1977)と述べられている。至極当然の意見である。特に、この点を意識しておきたい。

2. 土気緑の森遺跡群

(1) 概要 土気緑の森工業団地は、千葉県土地開発公社によって東京湾に流入する村田川の最上流域に計画された。当文化財センターは同工業団地予定地内に所在した遺跡群を造成工事に先立って昭和60年から平成2年にかけて発掘調査を実施し、その成果を1994年に発掘調査報告書として刊行した。

この発掘調査は村田川最上流域の遺跡が対象となったということに特徴があり、河川最上流域の遺跡の在り方を知る上で注目される。

なお、ここではこの団地内に所在した遺跡を「土



- | | | | | | | |
|-----------------|--------------|----------|----------|----------|----------|----------------|
| 1 大野第2 | 2 大野第3 | 3 大野第4 | 4 大野第5 | 5 大野第6 | 6 大野第7 | 7 大野第8 |
| 8 大野 | 9 大野第9 | 10 西大野第3 | 11 大野第1 | 12 西大野第1 | 13 東大野第1 | 14 東大野第2 |
| 15 大野南 | 16 南大野第1 | 17 東大野第3 | 18 南大野第4 | 19 東大野第4 | 20 南大野第5 | 21 大野第10(保存地区) |
| 22 南大野第4 (保存地区) | 23 力地区(保存地区) | | | | | |

第1図 土気緑の森遺跡群位置図 (1/25,000)

気緑の森遺跡群」と仮称しておく。

(2) 環境 本遺跡群は東京湾に注ぐ村田川最上流域に位置し、標高60m～80mを測る。谷部の標高はおおむね40mであるので、比高はおおよそ20～30mを測る。遺跡は急峻な尾根状の台地上に立地し、谷を見下ろす景観を呈する。

(3) 遺跡の概要 先土器時代遺物の出土した遺跡は10箇所、全く確認されない遺跡は10箇所を数える。石器群(ブロック)は54箇所にあふ。西大野第1遺跡が10箇所、東大野第2遺跡が29箇所と際だって多い。特に、東大野第2遺跡は東西60m、

南北70mを測る環状ブロックを呈しており注目される。

縄文時代では、中期の集落が大野第3遺跡(住居跡3軒)、大野第7遺跡(住居跡3軒)、大野遺跡(住居跡1軒)、大野第9遺跡(住居跡3軒)、西大野第3遺跡(住居跡2軒)、大野第1遺跡(住居跡8軒)、西大野第1遺跡(住居跡3軒)、大野南遺跡(住居跡3軒)から検出された。いずれも加曽利E式期である。住居跡の検出されない他の遺跡からもこの時期の遺物が出土していることから、土気緑の森地区内では、加曽利EⅡ式～EⅢ

	遺跡名	調査面積㎡	旧石器				縄文				弥生		奈良・平安			備考
			ブロック数(点)	住居	土坑	小竪穴	その他	住居	土坑	住居	掘立柱	その他				
1	大野第2	10,000	2(16)	0	0	0		0	0	0	0					
2	大野第3	13,000	3(19)	4	29	0		0	0	1	0					
3	大野第4	18,200	1(15)	0	14	0	A	0	0	0	0					
4	大野第5	4,190	1(1)	*0	0	0		0	0	0	0					
5	大野第6	4,200	0(0)	*0	0	0		0	0	0	0					
6	大野第7	33,900	4(88)	2	84	0		1	50	5	4	D		陥穴68/84		
7	大野第8	4,000	0(0)	0	0	0	B	0	0	0	0					
8	大野	29,190	2(171)	1	50	0		0	0	0	0			陥穴5/50		
9	大野第9	23,000	0(0)	3	108	0		0	0	0	0					
10	西大野第3	4,680	0(0)	2	24	0	C	0	0	0	0					
11	大野第1	104,200	0(1)	8	236	1		0	0	1	4			陥穴227/236		
12	西大野第1	54,498	10(600)	3	70	0		0	1	12	0	E				
13	東大野第1	4,100	0(0)	0	11	0		0	0	0	0			陥穴11/11		
14	東大野第2	25,610	29(866)	1	37	0		0	0	0	0			陥穴14/37		
15	大野南	14,011	1(100)	3	25	0		0	0	0	0					
16	南大野第1	2,000	0(0)	0	3	0		0	0	0	0					
17	東大野第3	32,402	3(45)	4	7	1		0	0	0	0			早期住(井草)		
18	南大野第4	8,625	0(0)	2	8	0		0	0	0	0			陥穴1/8、早期住(稻荷台)		
19	東大野第4	5,000	0(0)	*0	0	0		0	0	0	0					
20	南大野第5	13,400	0(0)	*0	0	0		0	0	0	0	F				

(注1) 所在地はいずれも千葉市大木戸町であるので、番地は省略した。

(注2) *は遺物包蔵地。東大野第2から旧石器時代の環状ブロック、焼土検出箇所2、炭化物検出箇所2。縄文時代土坑は陥穴を含む。

A. 粘土採掘坑1箇所 B. 焼土遺構9箇所 C. 石鏃工房跡1箇所 D. 方形周溝状遺構2箇所
E. 土坑5基、溝1条 F. 平安時代炭窯・作業場

表1 土気緑の森遺跡群一覧

式のころ、支谷に面した台地上に点々と集落が形成され、相互に関連性を持ちつつ生活していたと考えられよう。なお、大野遺跡から土坑50基（陥穴5基）、大野第9遺跡から土坑108基、西大野第3遺跡から土坑24基、大野第1遺跡から土坑236基（内、陥穴227基）、西大野第1遺跡から土坑70基、東大野第1遺跡から土坑11基（内、陥穴11基）、大野南遺跡から土坑25基が検出されている。

この他、注目すべき遺跡としては、早期井草期の住居跡4軒、小竪穴1基、土坑7基が検出された東大野第3遺跡、早期稲荷台期の住居跡2軒、土坑8基（内、陥穴1基）が検出された南大野第4遺跡、前期と考えられる住居跡1軒、土坑37基（内、陥穴14基）が検出された東大野第2遺跡などがある。

弥生時代は、河川最上流域という自然環境によるのであろうか、遺物・遺構とも稀薄である。住居跡は大野第7遺跡の1軒のみである。市原市草刈遺跡、菊間遺跡、大厩遺跡などの所在する村田川の中流域とは様相が大きく異なる。

古墳時代の住居跡は検出されない。弥生時代と同様の状況を示すが、古墳（方墳）が1基確認されている。検討を要する点である。

奈良・平安時代の住居跡は大野第3遺跡で1軒、大野第1遺跡で1軒、西大野第1遺跡で12軒、大野第7遺跡で5軒検出された。西大野第1遺跡が比較的まとまっている以外は稀薄である。この状況は、基本的には、弥生時代、古墳時代と同様であるが、前の時代と比較して住居跡軒数が格段に増加している点が注目される。これには社会環境・自然環境が大きく影響しているのであろう。これらの解明が今後の課題である。

3. 先土器時代の遺跡分布

遺跡の分布状況を検討するに当たって、時期別の分布を概観し、さらにその変遷と意味するところを考えてみたい。その際、石器群の時期を特定するには、出土層位を参考としてゆきたい。また、CR, F, CIを石器製作跡を示す石器、K, UF, RF, ES, SS, G, P, D, A, Hなどを生活の跡を示す石器と大まかにとらえておきたい（略号は表を参照されたい）。なお、本遺跡群は村田川の支流によって開析された台地にあり、その支谷を第1図のように仮称した。

(1) 時期別遺跡の分布

X層から出土した石器群は西大野第1遺跡の1か所であり、B6～B11の6ブロックが確認されている。ただし、B10・B11は石器が1点しか出土していない。この遺跡は村田川A支谷とB支谷に挟まれた台地上にあり、石器群がB支谷に向かって立地する。

ところで、西大野第1遺跡B6はF+CI+UF+RF+P+A、B7はCR+F+CI+UF+RF+P+A、B9はCR+F+CI+UF+P+Aであり、B6がCR、B7がRFを欠くなど異なる点もあるが、Aを共通にもっており、共通性のある石器群と考えたい。また、B6、B8ともCRを欠いているが、F+CIが認められることから、石器が製作されていた可能性もある。B10はUF、B11はCRが各1点出土している。また、使用石材は他段階の石器群に比べて種類が多く、チャート・頁岩・黒曜石・安山岩・メノウ・珪質頁岩・珪質凝灰岩・粘板岩・砂岩・閃緑岩・玄武岩など多種類からなり、各石器群も多様である。これはこの時期の特徴である。このような点からB6～B11の6ブロックに同時性をみたい。

西大野第1遺跡B6～B11はこの時期の土気緑の森遺跡群の中で生活の痕跡が認められる唯一の遺跡である。一般的に、先土器人は移動生活を送っていたと考えられている。この場合、遺跡群内に同時期の石器群が他にあってよいのであるが、本遺跡群には認められない。西大野第1遺跡が土気緑の森遺跡群の西端に位置していることから、遺跡群の外側、村田川A支谷に面する台地上に石器群が立地するとも考えられる。しかし、ここではむしろ西大野第1遺跡以外に石器群の確認できないという点に注目したい。この点がこの時期の遺跡分布の特徴である。西大野第1遺跡を拠点的遺跡と考えると、この遺跡を中心として地図上に半径約2kmの円を描くことができる。これは先土器人の活動領域と考えられよう。

IX層から出土した石器群は東大野第2遺跡の1か所であり、B1-1～B1-7、B2-8～B2-9、B3-11～B3-13、B4-14～B4-17、B5-18～B5-21、B6-22～B6-26、B7-27～B7-29の7群29ブロックに分けられ、環状を呈する。これらは村田川C支谷とその支谷によって形成された台地上に立地し、前時期と同様、他にこの時期の石器群は認められない。地図上には東大野第2遺跡を中心とする半径

約2kmの円が描かれる。

ところで、東大野第2遺跡では、B1-2,4,B2-8,10,B3-12~14,B5-120,21,B7-27にCRの存在を認められるが、これを欠くブロックが約65%を占める。しかし、F+CIがすべてのブロックに認められることから、大多数のブロックで石器製作が行われていたと考えられよう。一方、生活跡を示す石器の組成は約半数で認められる。また、B1-3・B1-6・B2-8にブロック外の接合関係、B1-3・B2-8に群外の接合関係、B2-8・B2-9・B2-10にブロック外の接合関係が認められ、東大野第1遺跡の7群29ブロック間に何らかの関係があったことが推定される。また、この時期、群外の接合関係から最低限2群10ブロックが併存していたと考えられる。焼土集中地点や炭化粒集中地点が2群にまたがることもそのことを証明しているのであろう。このような点から単純計算すると、東大野第2遺跡は近接して3時期にわたって形成されたものといえよう。しかし、ここでは、各ブロックが同じ層位から検出したものであること、遺跡が本遺跡群内に1か所しか認められないことから、同一単位集団によって形成されたものであって、各ブロックは同時性の幅の中に収まるものと考えておきたい。

なお、石材の面からは黒曜石・安山岩・メノウのセットが目立つ。前の時期に出土点数の少なかった黒曜石が普遍的に使用されるようになり、メノウが50%を越える。B1はメノウが他に比べて少ない。

VII層から出土した石器群は西大野第1遺跡B12、大野第7遺跡B1、大野遺跡B3、大野南遺跡B2・B3、東大野第3遺跡B3の5遺跡、6群を数えることができる。遺跡の分布は前の時期とは異なり、遺跡群全域に拡散する。これらを地図上にドットすると、西大野第1遺跡B12、大野第7遺跡B1が村田川B支谷の中流域、大野遺跡B3、大野南遺跡B2・B3、東大野第3遺跡B3が村田川B2支谷とC支谷の最奥域に位置しており、それぞれ半径約0.5~0.6kmの円を描くことができる。しかし、出土層位を詳細にみてゆくと、状況が異なる。

VII層下部段階の石器群は西大野第1遺跡B12であり、他に認められない。この組成はF+CI+Kであり、石器製作を伴った生活跡であろうが、貧弱である。

上部段階の石器群としては、VI層からVII層にか

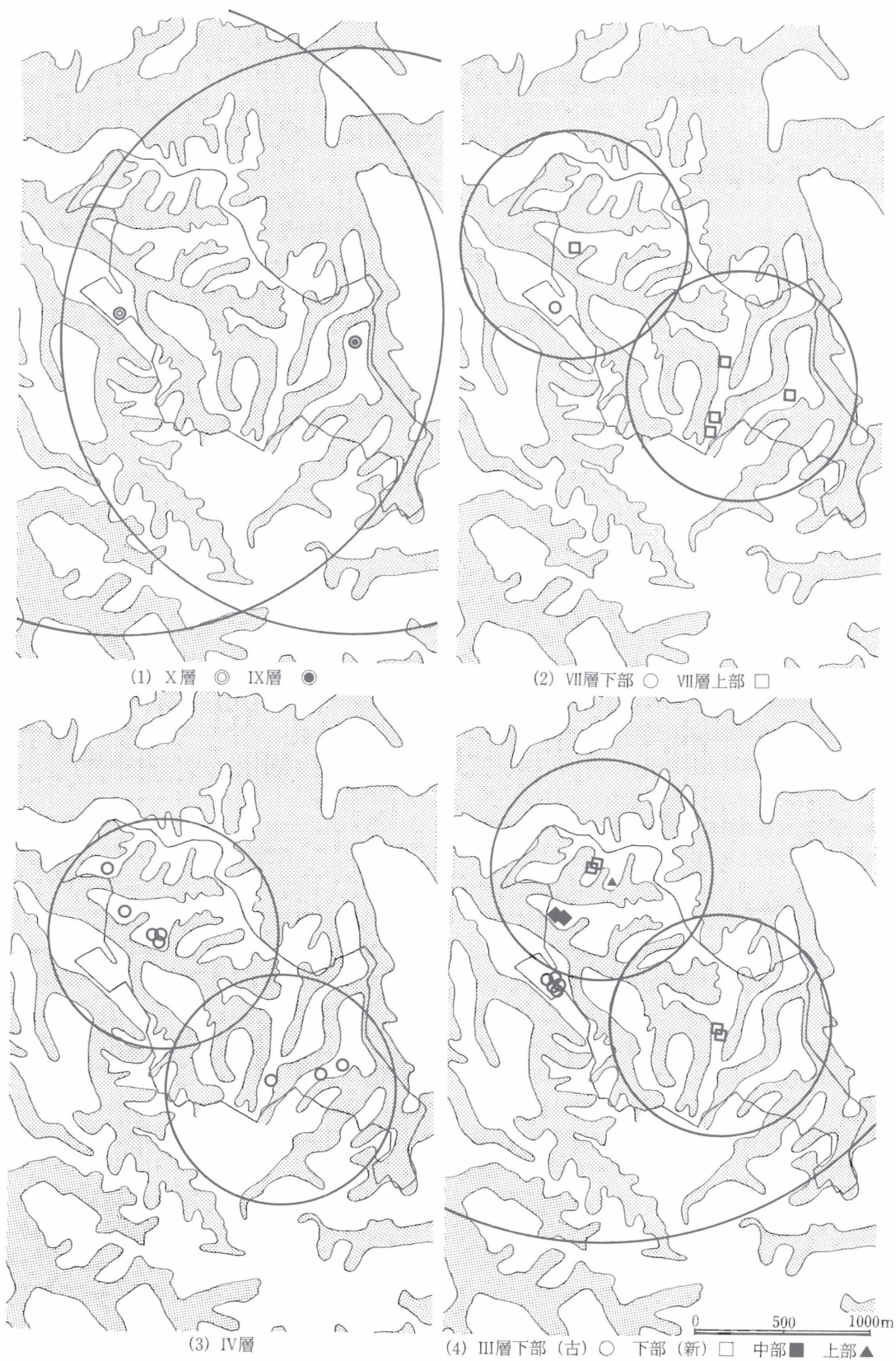
けて出土するものの、VII層を中心とする大野第7遺跡B1、大野南遺跡B2、さらに石器の関係から大野南遺跡B2と同時性が予想される同B3がある。大野南遺跡B2・B3は珪質頁岩をもち、大野第7遺跡B1も珪質頁岩を有しているので、これらに関連性があったと考えておきたい。また、大野遺跡B3、東大野第3遺跡B3は出土点数も少ないので、VII層内の上下関係は分からないが、分布状況からVII層上部段階と考えておきたい。

ところで、村田川B支谷の中流域の大野第7遺跡B1はF+CI+UF+ES+Gからなっていることから石器製作を伴った生活跡であり、また多様な組成を示すことから拠点の石器群であったと考えられる。一方、村田川B2支谷とC支谷の最奥域の大野遺跡B3はUFが1点、大野南遺跡B2はUFが3点、B3はFが1点、東大野第3遺跡B3はFが1点出土しているのみであり、石器製作にかかわる組成はみられず、貧弱である。短期的な石器群と考えられる。

このようにVII層上部段階では拠点の石器群と組成の貧弱な石器群が認められるようになるのである。組成の貧弱な石器群は拠点の石器群に付随するものであろう。しかし、本遺跡群をみると、拠点的な大野第7遺跡B1と他は地形的に離れていて活動領域が異なるものとみえるので、これらが相互に関連性があったとすることは疑問を感じる。ここでは、この段階にこのような遺跡のあり方があったことを確認しておきたい。

IV層の石器群は大野第3遺跡B1・B2・B3、大野第4遺跡B1、大野南遺跡B1、東大野第3遺跡B1・B2、大野7遺跡B2の5遺跡8群である。前の時期と同様に遺跡群全域に分布する。これを地図上にドットすると、大野第3遺跡B1・B2・B3、大野第4遺跡B1、大野7遺跡B2と大野南遺跡B1、東大野第3遺跡B1・B2の2グループに分けられる。

前者は村田川B支谷の右岸にほぼ半径0.7kmの範囲に存在する。大野第3遺跡B1はF+CI+RF、B2はH、B3はCR、大野第4遺跡B1はCR+CI+D、大野7遺跡B2はCR+Fからなる。大野第3遺跡B3から珪質頁岩製のCRが1点出土している。大野第3遺跡B1出土の石器は珪質頁岩製が78%も占めるので、これらに共通性を認めることができようか。また、大野第3遺跡B1・B2・B3は泥岩が共通するので、これらに石器群の間に何らかの関係があつ



第2図 層位別石器群の分布

たとえておきたい。大野第4遺跡B1からはCRが4点、Dが3点出土している。

一方、後者は村田川B支谷及び村田川C支谷の奥部のほぼ半径0.7kmの範囲に存在する。大野南遺跡B1はCR+F+CI+UF+K+G+T、東大野第3遺跡B1はCI+UF+K+SS、B2はCI+F+UFからなる。大野南遺跡B1は石器製作や生活の痕跡を示す安定した組成を示す。

このようにIV層段階では活動領域が分けられること、また、石器群の組成をみると、大野南遺跡B1が他に比べ安定した様相を示すものの、全体的に平均的であることを指摘できよう。これらはこの段階の特徴である。

III層の石器群は大野2遺跡B1・B2、大野5遺跡B1、大野7遺跡B3・B4、大野遺跡B1・B2、西大野1遺跡B1～B5の5遺跡、12群である。石器群は前の時期と同様に遺跡群全域に分布する。しかし、詳細にみていくと、様相は異なってくる。

III層下部から出土する石器群は大野2遺跡B1・B2、大野遺跡B1・B2、西大野1遺跡B1～B5であり、3遺跡、9群を数える。大野2遺跡B1・B2、西大野1遺跡B1～B5は村田川A支谷ないしB支谷の中流域、これらの上流1kmに大野遺跡B1・B2が位置する。石材をみると、粘板岩・砂岩を特徴とするグループと珪質頁岩・チャート・メノウを特徴とするグループに分けられる。前者は大野2遺跡B1・B2、大野遺跡B1・B2であり、後者は西大野1遺跡B1～B5である。これを時期差と考えると、メノウが前の時期に認められることから西大野1遺跡B1～B5がやや古く、III期中位の大野7遺跡B3・B4にも粘板岩・砂岩が認められることから大野2遺跡B1・B2、大野遺跡B1・B2がやや新しいと考えられよう。

III層下部古段階の石器群は、西大野1遺跡B1～B5の5群1遺跡しか確認されていない。B1の石器組成はCR+F+CI+RF+UF+K+SS+礫、B2はCR+F+CI+RF+礫、B3はCR+F+CI+RF+UF+ES+SS、B4はCR+F+CI+UF+K、B5はCR+F+CI+K+Pと豊富であり、西大野1遺跡は拠点的性格をもっていたと考えられる。いずれの石器群も珪質頁岩を主体とする点が共通する。また、本遺跡は土気緑の森遺跡群内の単独遺跡であることから、半径約2kmの円内を活動領域としていたといえよう。

III層下部新段階には、村田川B支谷中流域に大野2遺跡B1・B2、村田川B支谷上流域に大野遺跡B1・B2が存在する。大野2遺跡B1はCR+F+UF、B2はCR+F+RF+UF、大野遺跡B1はCR+F+CI、B2はCR+F+CI+台形石器であり、いずれも石器製作を伴った生活跡であり、それぞれ半径0.5～0.6kmを活動領域としていたと考えられよう。

III層中位には、大野7遺跡B3・B4があるのみで他に認められない。B3とB4は母岩に共通性が認められないものの、剥片で大形のものや形態に類似性のあるものなど共通点も認められる。またB3は粘板岩・砂岩、B4は安山岩・砂岩・泥岩からなり、黒曜石や珪質頁岩の認められない点が共通している、B3とB4に同時性のあったと考えられよう。B3はCR+F+UF、B4はF+CIからなる。この段階では遺跡群内に1か所しか認められないので、この石器群を中心とした半径約2kmの円が描かれ、これを活動領域としていたと考えたい。

III層上部には大野5遺跡B-1のみである。出土物はSS1点だけであり、遺跡群内に単独で存在する。性格も不明である。

(2) 遺跡分布の変遷

第1段階 X層の西大野第1遺跡は1か所、B6～B11の6ブロックからなる。IX層の東大野第2遺跡は1か所、7群29ブロックからなり、環状を呈している。それらの規模は異なるが、土気緑の森遺跡群内に1遺跡のみしか存在しない点、複数ブロックからなる点に共通性がある。これをこの段階の特徴ととらえたい。また、地図上には2遺跡を中心におおよそ半径2kmの円が描かれる。遺跡の在り方が類似するので、この段階の遺跡は半径約2kmの円内に1か所程度存在するものと考えておきたい。この範囲がテリトリーであり、東大野第2遺跡・西大野第1遺跡を狩猟採集の拠点にしていて、自然環境の変化によって動物が消滅するなど食糧の危機に遭遇した時、これらを形成した先土器人は他の場所に移動していったのであろう。

村田川流域でX層、IX層段階の石器群は、市原市押沼no.1, no.2遺跡、草刈遺跡、草刈六ノ台遺跡など特定された遺跡に集中する傾向がある。早計であるが、これらとなんらかの関係があった可能性もある。

層位	流域	(支谷中下流域)	(支谷上部流域)	遺跡数計	群数計
X層		西大野1遺跡B6~B11	……………	1	6
IX層		……………	東大野2遺跡B1-1~B7-29	1	9
VII層		大野7遺跡B1, 西大野1遺跡B12, 大野遺跡B3, 大野南遺跡B2, B3, 東大野3遺跡B3		5	6
	(下部)	西大野1遺跡B12	……………	(1)	(1)
	(上部)	大野7遺跡B1	大野南遺跡B2, B3(大野遺跡B3?, 東大3遺跡B3?)	(4)	(5)
IV層		大野3遺跡B1, B2, B3, 大野4遺跡B1 大野7遺跡B2	大野南遺跡B1, 東大野3遺跡B1, B2	5	8
III層		大野2遺跡B1, B2, 大野5遺跡B1, 大野7遺跡B3, B4, 大野遺跡B1, B2, 西大野1遺跡B1~B5		5	12
	(下部古)	西大野1遺跡B1~B5	……………	(1)	(5)
	(下部新)	大野2遺跡B1, B2	大野遺跡B1・B2	(2)	(4)
	(中部)	大野7遺跡B3・B4	……………	(1)	(2)
	(上部)	大野5遺跡B1	……………	(1)	(1)

表2 時期別遺跡群の分布

第2段階 VII層以降の遺跡分布の特徴は、VII層の石器群は5遺跡-6群、IV層の石器群は5遺跡-8群、III層の石器群は5遺跡-12群であり、前段階に比べて出土件数が増加し、遺跡群内に分散して存在したことがある。また、その分布に2つの形態を認めることができる。

第1は、遺跡分布に拠点の石器群と非拠点の石器群が存在し、それらを包括する活動領域が考えられることである。VII層上部段階は、村田川B支谷中流域の大野7遺跡B1と村田川B支谷、村田川C支谷最奥域の大野遺跡B3、大野南遺跡B2, B3, 東大野遺跡B3の2グループに分けられる。前者の大野第7遺跡B1はF+CI+UF+ES+Gの多様な組成からなることから拠点の石器群、後者の石器群は出土石器が数点であることから短期的な移動に伴う石器群と考えられる。これは遺跡分布の一形態であるが、本遺跡群では別々な活動領域を有しているとみられることから、それらには関連性がなく、隣接地域に補完する石器群があったと考えたい。

第2は、遺跡分布に活動領域が認められるとともに、石器群が独立的となることである。IV層段階では、村田川B支谷の中流域と村田川B支谷、C支谷の上流域の半径0.5~0.6kmに立地する2グループに分けられる。全体的に石器製作を含んだ生活跡を示す組成であり、平均的であることから独立的な石器群と考えられよう。III層下部段階は2期に分けられる。下部古段階の石器群は村田川

A・B支谷域の西大野1遺跡B1~B5である。いずれの石器群も組成が豊富であることから拠点の石器群と考えられる。下部新段階には、B支谷中流域の大野2遺跡B1, B2、B支谷上流域の大野遺跡B1, B2がある。組成上からそれぞれ安定的な組成を示し、平均的であることから、IV層段階と同様に独立的な石器群と考えられよう。中部段階ではB支谷中流域に大野7遺跡B3, B4の1か所のみであるが、組成上から拠点の、独立的石器群と考えられよう。

このように、第2段階は前段階と比較して遺跡数が増加するとともに、拠点の石器群とそうでない石器群、さらに独立的石器群が認められるようになったのである。

4. 遺跡分布の意味

先土器時代の遺跡分布にはそれを構成した集団が大きく関わっていたことはいうまでもない。現在、これは単位集団を基本とした離合集散を繰り返した季節的移動によるものであり、大規模な集団と小規模な集団が構成されていたと考えられている。石器群はその痕跡であり、居住地(ベースキャンプ・フィールドキャンプ)、作業場所、貯蔵場、食糧獲得場所、見張り場所、通過地点などからなる。

前項でみたように、土気緑の森遺跡群の先土器時代遺跡の分布状況はIX層段階とVII層段階に大きな断層が認められた。遺跡群内単独遺跡から複数

遺跡への変化である。

第1段階の東大野第2遺跡では石器群が環状ブロックを呈して検出された。環状ブロックは、本県において、四街道市御山遺跡第2文化層(X層上部)、同小屋ノ内遺跡(IX層)、同池花南遺跡第1文化層(IX層)、柏市中山新田1遺跡no.9地点(IX層)、横芝町・松尾町四ツ塚遺跡(IX層～X層)、成田市東峰御幸遺跡(空港no.61遺跡)などが知られている。橋本勝雄氏は、環状ブロックを検討して次のようにまとめられている(橋本1989)。

①関東地方で台形様石器を主体的に保有し石斧が伴う遺跡においては、特殊な存在というよりも、むしろ一般的な存在である可能性さえ想定できる。

②検出層層は武蔵野台地や下総台地においては第2黒色帯下部、北関東や東関東ではA T直下の黒色帯にあたる。時期としては武蔵野I b期以前であって、特に武蔵野台地のIX層段階に集中する。

③環状ユニットは、大規模で他のブロックとは隔絶ないしは孤立して検出されている。したがって、いろいろな場合の機能の複合体、言い換えれば単位集団の一定期間内における生活の行動様式が凝縮して残されるものと予想される。また、時的限定されることや、台形様石器を出土する遺跡における出現頻度および石器組成の類遠性より、同位置文化伝統もしくは生活様式に根ざした存在であるものと推察される。

土気緑の森遺跡群の場合は、先に述べたように、西大野第1遺跡と東大野第2遺跡の両石器群を同じ様相を示すものと考えた。X層の西大野第1遺跡B6, B7, B9の各ブロックから石斧、IX層の東大野第2遺跡B7-28から台形石器が出土しているため、両石器群とも橋本①の一端を示しているといえよう。西大野第1遺跡石器群がX層、東大野第2遺跡石器群がIX層から検出されていることは橋本②にも適合する。また、両石器群とも土気緑の森遺跡群内の単独遺跡であって、おおよそ半径2kmの円が描かれることから、橋本③の前段部分とも合致する。これらの点から西大野第1遺跡石器群、東大野第2遺跡石器群は環状ブロックの体系内に組み込まれよう。

このように環状ブロックは関東ローム層X層～IX層段階には必ずしも特殊なものではなく広範に認められることから、その社会的背景に共通性があったことがうかがえる。この段階の石器製作技術

はまだ未発達であり、石刃技法の萌芽期にあたって、狩猟形態も大型動物捕獲のための集団狩猟と考えられる。環状ブロックの組成が豊富であることからすると、大型動物の狩猟、植物採集などの拠点であったと位置付けられるのではなかろうか。これを示すのが環状ブロックに代表される第1段階の遺跡の分布状況であり、その活動範囲は半径2kmをこえるものであったと考えたい。そして動物や植物など食糧が枯渇した時、先土器人は活動領域を移動したのである。石器群の存在に動物の季節的移動による離合集散説をとる考えもあるが、ここでは積極的にその考えをとらない。

土気緑の森遺跡群は村田川の最上流域に位置するので、先土器時代の海面を考えると、この時期、遺跡群は海岸線からはるかに溯った分水界にあった。先土器人は谷の最奥部に湧水を求めて上ってきた動物、台地を渡って太平洋側に向う動物を待ち伏せて集団で捕獲したのであろう。

第2段階に含まれる関東ローム層VII層以降の段階になると石刃技法も確立し、ナイフ形石器も隆盛期を迎え、狩猟形態も大幅に改良化され、集団による狩猟から単位集団による狩猟へ変化したと考えられる。この現われが遺跡の増加であり、拠点とそれに付随した石器群、さらに独立的石器群の出現である。

VII層段階には、組成の豊富な石器群と貧弱な石器群が認められるようになった。これは拠点と非拠点石器群と考えられよう。本遺跡群では、支谷中流域と上流域にそれぞれ半径0.5～0.6kmの円が描かれるので、互いに独立的と考えられる。これゆえ、支谷中流域の拠点的石器群に付随する非拠点石器群、逆に組成上から非拠点的である上流域の石器群に関連する石器群は、それぞれ隣接地域に求められるとした。これはそれらに同時性が認められないと考えたからである。

IV層・III層段階には、石器製作を伴う生活跡を示す組成からなる石器群が多く認められるようになった。この段階の石器群は、それらの組成が平均的であることから、拠点と非拠点のセットになっていたのではなく、独立的であったと考えられよう。本遺跡群の場合、地図上に半径0.5～0.6kmの円が描かれるので、独立的石器群はそれぞれ独立した単位集団によって構成され、それを活動領域としていたのであろう。それは村田川を溯って

きた単位集団によって形成され、動物・植物など食糧の枯渇に伴って他の地域に移動していったのである。III層下部古段階及び中部段階では遺跡群内に1遺跡しか認められないが、それらは組成上から石器製作を伴った石器群であって拠点的であるとともに、独立的石器群と考えられよう。

さて、先土器時代の遺跡は単位集団の移動性、回帰性にあると考えられているが、本稿では活動領域は本来的に保守的なものであり、拠点的石器群を中心とした活動領域をある一定期間構成して、自然環境の激変などによる食糧の枯渇などやむを得ない状況下ではじめて移動生活を送ったと考えた。本遺跡群における石器群を段階別にみると、それぞれの件数は以外と少ないことが分かる。これは移動が行われた場合には本遺跡群をはるかに越えた広範な規模で行われたことを示すといえよう。近年、村田川中流域の千葉東南部地区、千原台地区では大規模な発掘調査が実施され、市原市草刈遺跡や同押沼遺跡などから良好な石器群が検出されている。これらは本遺跡群と関連性があるのではなからうか。土気緑の森遺跡群を考えるにあたっては、これら村田川流域の調査成果も踏まえて総合的に検討していくことが望まれるところである。

ともかく、現時点では、土気緑の森遺跡群の先土器時代の遺跡分布には単独遺跡から複数遺跡への変化が認められ、それには狩猟採集を生業とした社会構造が反映していたものと考えておきたい。

5. おわりに

土気緑の森遺跡群の先土器時代を遺跡分布という点からみてきた。その際、石器群の同時性、その幅に対する考えは根本的事項であって極めて重要であることを認識しつつも、現実には石器群の同時性について確信を持ってないままに話を進めてきた。石器群の同時性を特定するには石器の接合関係が重要な手段となるが、断片的という制約もある。今、最も必要なことは日頃から遺跡の同時性について十分考慮しておくことなのではあるまいか。

土気緑の森遺跡群は村田川最上流域に位置するので、遺跡の立地が普遍的な状況を示しているかどうか疑問がないでもない。また、本稿では遺跡の分布を独断と偏見をもって考えてきたともいえ

なくもない。この点は、視点を変えることによって、遺跡分布から何かが読み取れるのではなからうかと考えることで払拭してきた。本稿を研究ノートとしたのはこれゆえにである。

(論文等)

安蒜政雄 1985「先土器時代における遺跡の群集的成り立ちと遺跡群の構造」『論集日本原史』(株式会社吉川弘文館)

稲田孝司 1977「旧石器時代の小集団について」『考古学研究』24-2

岡村道雄 1990「日本旧石器時代史」『考古学選書』33(雄山閣)

小野 昭 1976「後期旧石器時代の集団関係」『考古学研究』23-1

近藤義郎 1976「先土器時代の集団構成」『考古学研究』22-4

戸沢充則 1990『先土器時代文化の構造』(榊同朋舎出版)

橋本勝雄 1989「A T降下以前における特殊な遺物分布の様相—いわゆる『環状ユニット』について(その1)」『考古学ジャーナル』309

春成秀爾 1976「先土器時代・縄文時代の画期について(1)」『考古学研究』22-4

(財)千葉県文化財センター 1984「先土器時代」『房総考古学ライブラリー1』

(報告書等)

(財)千葉県文化財センター 1993「土気緑の森工業団地内埋蔵文化財発掘調査報告書」

(財)千葉県文化財センター 1993「四街道市御山遺跡—住宅・都市整備公団物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書I」

(財)千葉県文化財センター 1990「四街道市内黒田遺跡群—内黒田特定土地区画事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」…池花南遺跡

(財)千葉県文化財センター 1985「常磐自動車道埋蔵文化財調査報告書IV」

(財)千葉県文化財センター 1993「千葉県文化財センター年報No18—平成4年度」…小屋ノ内遺跡

(財)千葉県文化財センター 1996「千葉県文化財センター年報No21—平成7年度」…四ッ塚遺跡
千葉県文化財法人連絡協議会 1997「平成8年度千葉県遺跡調査研究発表要旨」…四ッ塚遺跡

遺跡・ブロック名	層位	計	CR	F	CI	RF	UF	K	ES	SS	G	D	P	A	H	備考
大野5 B1	Ⅲ層上部	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	
大野7 B3	Ⅲ層中位	5	1	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
大野7 B4	Ⅲ層中位	9	0	8	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
大野 B1	Ⅲ層下部	23	1	2	20	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	
大野 B2	Ⅲ層下部	17	1	5	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
大野2 B1	Ⅲ層下部	8	1	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
大野2 B2	Ⅲ層下部	8	1	4	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
西大野1 B1	Ⅲ層下部	52	5	22	12	1	4	2	0	1	0	0	0	0	0	礫6
西大野1 B2	Ⅲ層下部	68	2	12	57	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	礫6
西大野1 B3	Ⅲ層下部	15	2	5	5	1	1	1	0	1	0	0	0	0	0	
西大野1 B4	Ⅲ層下部	62	4	13	43	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	
西大野1 B5	Ⅲ層下部	89	7	36	40	3	0	2	0	0	0	0	1	0	0	
大野3 B1	Ⅳ層	16	0	6	8	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
大野3 B2	Ⅳ層	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
大野3 B3	Ⅳ層	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
大野4 B1	Ⅳ層	15	4	0	8	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	
大野7 B2	Ⅳ層	6	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
大野南 B-1	Ⅳ層	55	3	31	12	0	2	6	0	0	1	0	0	0	0	敲石1
東大野第3 B-1	Ⅳ層	11	0	0	1	0	7	2	0	1	0	0	0	0	0	
東大野第3 B-2	Ⅳ層	17	0	6	4	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	
大野南 B-2	Ⅶ層	3	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	
大野南 B-3	Ⅶ層	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野第3 B-3	Ⅶ層	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
大野7 B1	Ⅶ層上部	22	0	8	4	0	4	0	1	0	1	0	0	0	0	
大野 B3	Ⅶ層	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野1 B12	Ⅶ層下部	3	0	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B1-1	Ⅸ層	18	0	7	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B1-2	Ⅸ層	35	1	16	15	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	敲石1
東大野2 B1-3	Ⅸ層	23	0	7	15	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B1-4	Ⅸ層	22	3	7	8	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	刃器状剥片1
東大野2 B1-5	Ⅸ層	27	0	9	16	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	焼土ブロック
東大野2 B1-6	Ⅸ層	19	0	2	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	炭化物集中地点
東大野2 B1-7	Ⅸ層	11	0	3	4	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B2-8	Ⅸ層	24	1	6	14	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B2-9	Ⅸ層	13	0	6	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B2-10	Ⅸ層	79	1	16	60	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B3-11	Ⅸ層	17	0	7	8	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	

表3 石器群別組成表 (1)

遺跡・ブロック名	層位	計	CR	F	CI	RF	UF	K	ES	SS	G	D	P	A	H	備考
東大野2 B3-12	IX層	40	2	16	21	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	炭化物集中地点
東大野2 B3-13	IX層	28	1	11	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B4-14	IX層	12	1	10	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	焼土ブロック
東大野2 B4-15	IX層	40	0	6	33	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B4-16	IX層	53	0	2	50	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B4-17	IX層	8	0	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B5-18	IX層	50	0	11	39	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B5-19	IX層	27	0	1	26	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B5-20	IX層	27	2	4	21	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B5-21	IX層	11	1	1	9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B6-22	IX層	45	0	2	42	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B6-23	IX層	27	0	4	22	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B6-24	IX層	22	0	5	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B6-25	IX層	15	0	1	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B6-26	IX層	24	0	5	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B7-27	IX層	6	1	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
東大野2 B7-28	IX層	76	0	5	68	1	1	0	0	0	0	1	0	0	0	
東大野2 B7-29	IX層	20	0	7	13	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
西大野1 B6	X層	34	0	7	21	1	3	0	0	0	0	0	1	1	0	
西大野1 B7	X層	35	2	4	21	2	2	0	0	0	0	0	4	1	0	
西大野1 B8	X層	6	0	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
西大野1 B9	X層	74	1	6	58	0	2	0	0	0	0	0	7	1	0	
西大野1 B10	X層	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
西大野1 B11	X層	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

(凡例)CR=石核、F=剥片、CI=碎片、RF=加工痕のある剥片、UF=使用痕のある剥片、K=ナイフ形石器、ES=搔器、SS=削器、G=彫刻刀、D=台形石器、P=ピエス・エスキーユ、A=石斧、H=ハンマーストーン

表3 石器群別組成表 (2)

遺跡・ブロック名	黒曜石	珪質頁岩	安山岩	頁岩	粘板岩	砂岩	チャート	メノウ	緑泥片岩	泥岩	珪質凝灰	閃緑岩	玄武岩	流紋岩	不明	種類計	備考
大野 5 B1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
大野 7 B3	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
大野 7 B4	0	0	1	0	0	7	0	0	0	1	0	0	0	0	0	3	
大野 B1	0	0	0	3	0	20	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
大野 B2	2	0	1	3	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
大野 2 B1	0	8	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	
大野 2 B2	0	0	2	1	1	3	0	0	0	1	0	0	0	0	0	5	
西大野1 B1	0	23	5	1	0	0	18	3	0	2	0	0	0	0	0	6	
西大野1 B2	0	61	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	
西大野1 B3	0	14	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
西大野1 B4	0	53	4	0	0	0	6	7	0	0	0	0	0	0	0	4	
西大野1 B5	0	51	15	4	0	0	6	0	0	3	0	0	0	0	0	5	
大野 3 B1	0	14	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0	0	0	0	4	
大野 3 B2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	
大野 3 B3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	
大野 4 B1	6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	2	
大野 7 B2	0	0	0	1	1	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	4	
大野南 B1	0	0	0	10	0	0	0	7	0	2	11	0	0	0	0	4	
東大野第3 B1	0	11	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
東大野第3 B2	0	17	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
大野南 B2	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
大野南 B3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
東大野第3 B3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
大野 7 B1	2	12	0	0	0	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
大野 B3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
西大野1 B12	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
東大野2 B1-1	0	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
東大野2 B1-2	1	0	9	1	0	0	0	0	0	24	0	0	0	0	0	4	
東大野2 B1-3	6	1	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
東大野2 B1-4	0	3	18	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	4	
東大野2 B1-5	5	0	21	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4	
東大野2 B1-6	0	0	19	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
東大野2 B1-7	4	1	5	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4	
東大野2 B2-8	11	1	11	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
東大野2 B2-9	6	0	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
東大野2 B2-10	28	0	40	0	0	0	0	11	0	0	0	0	0	0	0	3	
東大野2 B3-11	4	0	10	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3	

表 4 石器群別石材表 (1)

遺跡・ブロック名	黒曜石	珪質頁岩	安山岩	頁岩	粘板岩	砂岩	チャート	メノウ	緑泥片岩	泥岩	珪質凝灰	閃緑岩	玄武岩	流紋岩	不明	種類計	備考
東大野2 B3-12	2	0	37	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	2	
東大野2 B3-13	4	1	19	0	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4	
東大野2 B4-14	0	10	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	
東大野2 B4-15	5	0	20	0	0	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	3	
東大野2 B4-16	13	0	37	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3	
東大野2 B4-17	5	0	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	3	
東大野2 B5-18	7	0	43	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
東大野2 B5-19	0	0	26	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	
東大野2 B5-20	0	0	15	0	0	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	2	
東大野2 B5-21	1	0	9	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	
東大野2 B6-22	1	0	39	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	3	
東大野2 B6-23	0	0	25	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	
東大野2 B6-24	0	0	22	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
東大野2 B6-25	0	0	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
東大野2 B6-26	2	2	0	21	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4	
東大野2 B7-27	1	0	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3	
東大野2 B7-28	18	0	53	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	3	
東大野2 B7-29	2	0	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
西大野1 B6	1	5	0	1	4	0	18	1	0	0	3	1	0	0	0	8	
西大野1 B7	0	2	1	9	0	2	5	1	0	0	1	1	1	0	0	9	
西大野1 B8	0	1	1	0	0	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4	
西大野1 B9	0	0	9	3	4	7	26	1	0	0	0	1	0	0	0	7	
西大野1 B10	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
西大野1 B11	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	

表4 石器群別石材表 (2)